

桐朋中学・高等学校 前PTA会長 名取穰治

2日間の被災地での感想。（義援金を届けに行つて

今回桐朋のPTAや、生徒会などの協力で集められた義援金を宮古市の田老に届けに行く機会を得ました。これは5月のPTAの役員会のあとで集まった会でもし義援金を届けに行く機会があれば、是非PTAの役員であった自分もご一緒させてもらえないかとの願から実現したものでした。息子から聞いていた防波堤を見たいという思いと、また被災地に行つてみたい、私自身がまだこのような広域災害を見たことがなく、マスコミから得られる情報からでしかいつもこのような災害について判断できないことから出来ればと思つていたので理由でした。職場で被災地にボランティアで行くことに許可を求めたのですが上司からは許しをもらえませんでしたので千載一遇の機会でした。盛岡に着いてその日は1泊し翌朝被災地に向かいました。行きの道中は特に変わりなく東北の深い山の間を明るい日差しを浴びて川沿いの国道に沿つて進むという単調な時間が続きました。浦島理事と村松先生と話をさせて頂きこれはこれで大変貴重な時間でした。宮古に入り進んでいくとちょうど農業で言うなら町の休耕地というようなイメージの場所に出会いました。瓦礫の撤去がかなり進んでいたため、確かにここには以前町がありそこに暮らす人がいたと思えるのですが、コンクリートの基礎がむき出しになりその上には何もない、まさに休耕地？と思えました。

市役所から町を眺めました。テレビでの黒い波が町を呑み込む、確かにその場所を見ていました。しばらく町の中を見させていただいた後に、田老へ向かいました。そこからは景色もいろいろな変化を見せました。削られたような入り江、何事もなかったかのような街並みなど。田老は町の大半が無なくなっていました。先ほどの休耕地というよりは映画などでみる戦場のあのような印象を受けました。瓦礫が多く山積みになれこのあとどのように処理していくのだろう、いつまでかかるのだろうという印象を持ちました。また防波堤の上で港を見まわしましたが3月11日のその時の海を想像するとやはり自然のすごさを感じました。以前にこの場所が津波の被害を受けた時にどこまで海の水が来たのかを示す標識が崖にかかっていました。かなり高いところにありましたが

今回はそれを超えていると聞きまた自然の恐ろしさを再確認しました。田老を役場の方に案内していただき、また近くにある避難所、仮設住宅のあるグリーンピアというところまで足を延ばし、そこで避難してきている人を診察している田老診療所の黒田先生とお会いし、貴重な話をお聞きしました。NPOなどのボランティアの方々に対する地元で診療をしている医師の考え方や被災地における医療の内容、大変さなどでこれは私自身の仕事に対する考え方を再度考えさせられました。その後再び役場にもどり、挨拶をさせていただき、また盛岡へと朝来た道に戻りました。私達ははこのように来た道に戻って、また明日になれば今と変わらない日常の生活に戻れるのですが、被災地の方々は夢であってくれ、なんで私たちがという思いがあつたに違いありません。

田老町民憲章は次のように書かれていました。昭和53年5月14日に制定されたものです。

わたくしたちは、この美しく豊かな自然に感謝するとともに、幾たびかの災害をのりこえ、築きあげた先人の遺産と、たくましい意志をうけつぎ、さらに限りない飛躍と幸せをねがい、ここに町民憲章を定めます。

- 一、 自然を愛し美しく清らかな街を作ります。
- 一、 きまりを守り、互いに助けあい、明るい町をつくります。
- 一、 仕事に励み、工夫を生かし、豊かな町をつくります。
- 一、 広く学び、文化を高め、希望の町をつくります。
- 一、 心とからだをきたえ、安らかな住みよい町をつくります。

いつの日かまた田老が活気を取り戻し、桐朋の生徒達がまた東北の地に足を延ばすことができること、被災地の方々の1日も早い復旧と、亡くなられた方々の冥福をいのり、報告とさせていただきます。